

平成29年度 石川県立飯田高等学校学校評価計画書（最終評価）

No. 1

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	最終評価	成果と次年度の改善策
1 生徒の多様な進路希望を実現するための相応な学力養成	① 教員の授業改善と生徒の進路意識の向上を図る。	各学年で10%、20%、50%の基準を A:すべて達成した B:2つ達成した C:1つ達成した D:すべて達成できなかった	1学年 60以上12.4%、55以上24.7%、50以上48.3%であり、2つ達成したのでB評価 2学年 60以上6.9%、55以上21.6%、50以上47.4%であり、1つ達成したのでC評価	1年 B 2年 C 総合 B (進路指導課)	1学年は11月模試に比べて増加傾向にあり今後も努力を継続する必要がある。 2学年は1月記述模試での結果はCであるが11月記述及び2月マークでは共にAである。 3年次は変動に注意し、成績が安定するよう指導する必要がある。
	② 進路実現可能な学力を身につけるために自立的学習習慣を定着させる。	アンケートで予習復習を行っているかを調査し、肯定的な回答が、 A:70%以上 B:50%以上 C:30%以上 D:30%未満	1年 39% C 勉強は行っているが、指示された課題を中心に勉強している生徒が54%いる。 2年 46% C 指示された課題を中心に勉強している生徒が54%、受験に備えた学習をしている生徒は3%であった。	C (進路指導課)	学習習慣の確立をめざし、週末を含め家庭学習の課題を出しているが、学年の進行とともに予習・復習や受験に向けた主体的な勉強にシフトしていくよう心掛けなければならない。指導の改善に努めたい。
	③ 幅広い知識と、情報処理能力を身につけ、公務員試験に対応できる力を育成する。	公務員試験直前の模擬試験においてBランク以上の生徒の割合が A:80%以上 B:60%以上 C:40%以上 D:40%未満	公務員模擬試験受験者13名中、B判定は3名のみ、9名がC判定、1名がD判定という結果で、ここ数年の最低の結果である。	D (進路指導課)	C判定の9名の底上げに努めるため、個別面談で各自の弱点を理解させ、夏休み中に重点的に学習させ、本番に備えさせた。その結果、最終的に11名・22件の合格につなげることができた。
	④ 校内研修や互見授業の成果を教育活動全体に還元し、教員の授業力を高める。	生徒による授業評価で、教員は授業において深く思考させる場面を増やし、学習意欲を高める工夫をしているとの回答が A:90%以上 B:80%以上 C:70%以上 D:70%未満	生徒による授業評価では工夫をしているとの回答は76.6%である。	C (教務課)	板書やプリントの工夫、理解させようとする熱意についての評価はそれぞれ89.1%、95.0%と高い評価を得ている。 互見授業を実施した教員は84.8%であり、特に若手を中心に複数回参観する教員も増加している。 ICT機器を活用する授業は増えてはいるが、工夫に対する評価が64.2%であり、今後、様々な事例を参考にするなど研究が必要である。
学校関係者評価委員の評価		・公務員に関する指導の評価がD評価になっているが、結果的には11名・22件の合格であり、例年並みなのではないか。			
学校関係者評価委員の評価を踏まえた今後の改善策		・公務員試験は例年9月から始まるため、その指導に対する評価に関しては最終評価を待つことが最善なのだが、中間評価において公務員試験直前の模擬試験結果を達成度判断基準としたことによって、D評価となってしまった。達成度判断基準の見直しにより、適正な評価になるよう改善したい。			

重 点 目 標		具 体 的 取 組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	最終評価	成果と次年度の改善策
2	生徒の人間関係力の向上と生活習慣・学習習慣の定着	① HR活動や委員会活動をとおして、集団づくりや人間関係づくりを進め人間関係力を育てる。	生徒の自己評価アンケートから日常的に達成できた割合が A：80％以上 B：70％以上 C：60％以上 D：60％未満	生徒による自己評価の結果は、91％。 1年 90％ 2年 91％ 3年 92％	A (生徒指導課)	自己評価は良好である。次年度は、生徒が自主的・積極的に具体的プランを立て、人間関係力を高めることができるように指導改善する。
		② 携帯電話・スマートフォンの使用ルール遵守と1日の使用時間を削減する指導を進める。	①生徒の自己評価アンケートから日常的に達成できた割合が A：85％以上 B：70％以上 C：60％以上 D：60％未満 ②生徒の使用時間調査から1人あたりの1日平均使用時間が A:30分以内 B:40分以内 C:50分以内 D:50分より長い	生徒による自己評価の結果、日常的に達成できたと答えた生徒の割合が82％であった。 1日の平均時間は、67分である。 学年別の使用時間は、 1年 84分 2年 72分 3年 48分 であった。	B (生徒指導課) D (生徒指導課)	使用ルールの遵守やマナー等の自己評価は、まずまずの結果である。 1年生の使用時間が、短縮できなかった。入学時の早い段階での指導に力点を置く。
		③ 時間厳守の習慣の確立を目指し、「遅刻0運動」を継続する。	「遅刻0の日」が年間合計で A:160日以上 B:150日以上 C:140日以上 D:140日未満	授業日数 161日に対して「遅刻0の日」は124日。(H30.1.19現在))	C (生徒指導課)	例年同様、1人で複数回の遅刻者が多い。特に1年生の遅刻割合が高かった。 HR担任と連携を強固しながら個別指導を進める。
		④ 挨拶や服装・交通マナーなど基本的な生活習慣の定着について指導を徹底する。	生徒の自己評価アンケートから日常的に達成できた割合が A:85％以上 B:70％以上 C:60％以上 D:60％未満	生徒による自己評価の結果は、96 %。 1年 90％ 2年 91％ 3年 92％	A (生徒指導課)	自己評価結果は良好であるが、挨拶や服装・交通マナーに指導を要する一部の生徒がいるとの外部の声もある。全体指導を進めながら、個別指導を進める。
学校関係者評価委員の評価		・携帯電話・スマートフォンの使用時間の内訳は把握しているのか。 ・スマートフォンの使用については、「今の時代」を無視できないのではないのか。人間関係力の育成の面で良い面もあるのではないのか。				
学校関係者評価委員の評価を踏まえた今後の改善策		・アンケート調査により、ユーチューブ、ゲーム、ツイッター、メール等が使用時間の上位を占めていることは把握している。その時間を少しでも学習の時間へ向けることができるよう、今後とも指導して行きたい。				

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	最終評価	成果と次年度の改善策
3 普通科、総合学科それぞれの特長を活かした教育活動と相乗効果を生み出す教育の推進	① 進学希望者及び公務員希望者の進路実現を支援する体制を構築する。(普通科)	年度末進路状況において、進学希望者の A:80%以上が進路希望を実現した。 B:60%以上が進路希望を実現した。 C:50%以上が進路希望を実現した。 D:50%未満が進路希望を実現した。 公務員希望者の A:70%以上が進路希望を実現した。 B:60%以上が進路希望を実現した。 C:50%以上が進路希望を実現した。 D:50%未満が進路希望を実現した	国公立大学の合格者は現役実人数で40名(のべ41名)で、年度当初希望者64名に対し62.5%であった。 公務員希望者9名中8名(約89%)が進路希望を実現した。	B (進学指導係) A (就職指導係)	入学時より成績面で不安があった学年であるが、学年団を中心とした指導に応え努力を続けた結果、A組(文系)19名、B組(理系)21名(のべ22名)の合格者を出すことができた。 2年次10月から開始する公務員対策適性検査練習、3年次放課後補習・夏休みの補習や個人面談、面接練習等の地道な指導が実を結んだものとは考えられるが、まだまだ改善の余地もあるのではないかと考えている。
	② 個に応じた進学指導、公務員指導、就職指導を充実させ、ミスマッチのない進路選択をさせる。(総合学科)	年度末進路状況において、進学希望者の A:90%以上が進路希望を実現した。 B:70%以上が進路希望を実現した。 C:60%以上が進路希望を実現した。 D:60%未満が進路希望を実現した。 公務員希望者の A:50%以上が進路希望を実現した。 B:40%以上が進路希望を実現した。 C:30%以上が進路希望を実現した。 D:30%未満が進路希望を実現した。 就職希望者の内定が A:12月までに100%を得た。 B:1月に100%を得た。 C:2月に100%を得た。 D:3月以降にずれ込んでしまった。	年度当初の進学希望者13名のうち、進学した生徒は12名で92.3%である。 公務員希望者4名中3名(約75%)が進路希望を実現した。 就職希望者の内定が1月に100%を得た。	A (進学指導係) A (就職指導係) B (就職指導係)	総合学科については推薦をうまく使って進路を確保すべきである。商業系の資格を上手く利用する方向を探るべきと考える。 一次(筆記)で合格しながら、二次(面接)で不合格になった生徒がいた。次年度は二次対策も含めた指導を更に強化することが必要と考えている。 早期に志望企業を決定し、就職試験対策をとることができた。好景気に後押しされて、最初の応募で不採用となった生徒も二度目の応募で内定を得た。次年度も職業意識の高揚・志望する事業所の能動的な選択の支援を継続したい。

重 点 目 標	具 体 的 取 組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	最終評価	成果と次年度の改善策
3 普通科、総合学科それぞれの特長を活かした教育活動と相乗効果を生み出す教育の推進	③ 地元に着愛を持つとともに、地域産業と連携し、地域を支えるリーダー的気質を有した人材を育成し、地域の方々と人間関係力を身に付けさせる。	事後アンケートにおいて、地域の方々と人間関係力が身に付いたと実感できた生徒が、 A:80%以上 B:60%以上 C:50%以上 D:50%未満	地域の方々と人間関係力が身に付いたと実感できた生徒 とても実感した 11.7% 実感した 59.7% 全体 71.4%	B (商業科)	行ったアンケートでは授業や体験的行事を通して地域に着愛を感じる・地域に関わり貢献したいと回答した生徒が多かった。次年度も地域と連携した取り組みを継続していきたい。
	④ 学習意欲喚起のための方策として、各種検定・資格取得を推進する。	学年及び系列の目標とする各種検定資格に対する取得率が A:75%以上 B:60%以上 C:50%以上 D:50%未満 ※(合格者数)／(受験者数)	合格率は全体で61.8%。 簿記検定 54/129 (41.9%) 情報処理検定 74/110 (67.3%) 珠算・電卓検定 216/291 (74.2%) ビジネス文書検定 152/259 (58.7%) 商業経済検定 4/4 (100%) 英語検定 51/99(51.5%) の結果である。 全体 551/892 (61.8%)	B (商業科)	直前の補習対策を強化した結果、昨年度より合格率が上昇した。次年度も引き続き合格に向けて、過去の傾向や生徒の弱点を分析しながら今年度と同様の取り組みを行い、生徒の指導にあたりたい。
	⑤ 普通科・総合学科の生徒が互いの活動を認め合い切磋琢磨し、学校を活性化する。	生徒の意識調査アンケートから両学科の生徒が相互に高め合っていると感じる割合が A:80%以上 B:70%以上 C:60%以上 D:60%未満	普通科生徒 活動の理解度 肯定回答 50.2% 高め合い 肯定回答 49.2% 総合学科生徒 活動の理解度 肯定回答 31.4% 高め合い 肯定回答 22.5%	D	普通科の「ゆめかな」活動等、総合学科の販売実習や校外活動など「実践的活動」について、相互の共有が脆弱なことが明らかになった。次年度以降、両学科の学習活動等について、校内の交流や広報を活発にすることにより、それぞれの活動が本校の活性化を担っていることの理解へと導いていく。
学校関係者評価委員の評価		・重点目標3の⑤のアンケート結果を見る限り、普通科と総合学科との間には一体感が欠如しているようにも感じるが、異なる学科同志の交流の難しさは本校に限らずどこにあっても存在する問題であろう。			
学校関係者評価委員の評価を踏まえた今後の改善策		・普通科の「ゆめかなプロジェクト」、総合学科の「地域学」の連携をその糸口とし、活性化の相乗効果につなげたいと考えている。			

重点目標		具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	最終評価	成果と次年度の改善策	
4	地域の教育力を活かした教育活動を展開し、地域と連携した学校づくりの推進	①	本校が実践する教育活動や学校行事に関する情報発信を積極的に進め、本校に対する地域の理解を深める。	学校HPの更新が A：週1回以上　B：2週間に1回以上 C：3週間に1回以上 D：月に1回できた。 保護者及び地域代表者に対するアンケートの回答が A：広報活動を十分に行っている。 B：まあまあ行っている。 C：あまり行っていない。 D：全く行っていない。	学校HPの更新履歴を確認した結果、週1回以上更新されていることが認められた。 保護者及び地域代表者に対するアンケートの集計結果では、肯定評価(A・B)が97%であった。※中間評価(95%) A:62.9 %　B:34.1%	A (総務課) A (総務課)	取組に対する評価は年間を通して良好なものであったが、支持して頂ける声に応え続けることが大切なことだと受け止めている。次年度以降も、継続していきたいと考えている。
		②	ゆめかなプロジェクトを通して、公共施設や地域企業などを含む地域との連携を積極的に進め、交渉能力や発信力を高める。	校外の方との交渉機会やプレゼンの機会、施設見学などの連携を通した課題研究活動を行ったグループが、 A：75%以上、　B：60%以上 C：45%以上、　D：30%未満	今年度は、年度当初から生徒に地域との連携を促した結果、24のグループがある中で20のグループ(83%以上)が連携を通した課題研究活動を行った。	A (普通科)	別途行ったアンケートでも発想力や発信力がついたと回答した生徒が昨年度より増えた。またプレゼンテーションのコツやポイントを分かりやすく指導していきたい。
		③	地元の小学校高学年・中学校を対象に、理科実験授業を年に1回行い、理科に関する興味・関心を高める。	実験内容に興味を持ち、自ら理解を深めるための考察や追加実験をしたいと回答する児童・生徒の割合が A:90%以上　B:80%以上 C:70%以上　D:70%未満	今年度は、ゆめかなプロジェクトと連携し、本校生徒が教員役となり、小学校で授業を行った。楽しかった、また行いたいという意見が全ての児童(100%)で見られた。	A (理科)	本校生徒が授業を行ったことで、児童は親しみをもち、意欲的に実験に取り組んでいた。生徒が教員役をする際、安全面の指導を徹底していきたい。
		④	保護者懇談会への参加を含め、積極的な学校行事への参加を推奨する。	会員数379名のうち、保護者懇談会への参加を含め、学校行事への参加回数が3回以上の割合が A:90%(342人)以上 B:70%(266人)以上 C:50%(190人)以上　D:50%未満	今年度は、保護者懇談会への参加を含め、学校行事への参加回数が3回以上の割合が77%(292人)以上であった。	B (総務課)	HPや飯高タイムズをはじめ、様々な方法を駆使して、保護者に積極的な行事の参加を促した。おかげさまで、たくさんの保護者が行事に協力していただいた。引き続き学校に足を運んでいただけるよう、行事等の告知に力を入れていきたい。
		⑤	地域のさまざまな立場の方々に講師を依頼し、平時の授業(地域学Ⅰ、地域学Ⅱ、産業社会と人間など)を協同して創り上げる。	地域の方々に講師として授業をおこなった時間数が、 A:50時間以上　B:40時間以上 C:30時間以上　D:30時間未満	地域の方を講師にお招きした時間が 地域学Ⅰ:10時間、地域学Ⅱ:41時間 産業社会と人間:4時間 総合的な学習の時間:4時間 社会人基礎:1時間　(計60時間)	A (総合学科)	今年度は地域学の授業で学年を横断的にし、地域と連携した活動が増えた。今後も「継続的な連携」を進めるとともに、地域連携における取組を増やしていきたい。
学校関係者評価委員の評価		・「ゆめかなプロジェクト」は地域連携だけでなく、生徒たちのコミュニケーション能力の育成・向上にとっても良い取組だと思う。今後は、中学校との連携があっても良いのではないかな。					
学校関係者評価委員の評価を踏まえた今後の改善策		・「ゆめかなプロジェクト」に関しては、自治体をはじめ、地域社会の支援もあり、ますます活発な取組となっていくものと考えている。今後は機会をとらえ、より地域と一体となった活動になるようにと考えている。					

